

# 『リトル・ガール』

監督：セバスチャン・リフシッツ

2020年／フランス／85分



公式サイト

Netflix ほか配信中

DVD 発売中

発売元・販売元：オデッサ・エンタテインメント

©AGAT FILMS & CIE - ARTE France -

Final Cut For Real - 2020

## 社会を旅する シネマ

きつと もっと 近くなる  
きつと もっと 知りたくなる

マイノリティの人にとって暮らしやすい環境は、その当事者以外の人にとっても暮らしやすい、とよく言われる。その意味からも、トランスジェンダーの子どもとその家族を追った本作は、広く多くの人に観てほしい作品だ。

フランス北部に暮らすサシャは、男の子として生まれたが、2歳を過ぎた頃から性別の違和感を訴えるようになった。家族は当初、戸惑ったもののサシャが自分らしく生きられる道を応援しようとする。しかし7歳になったサシャは学校の壁にぶつかる。学校は女の子として認めてくれないのだ。スカートなど女の子らしい服装での登校は禁止。好きな鞆やペンケースも使えない。女性の呼称（「彼女」など）で呼んでもらうことも叶わない。果ては「サシャが女の子だと主張するのは親のせいでは？いつかは正常に戻るだろう」と差別発言まで。頑なに男女を区別しようとする学校の壁は厚い。

それでもめげずに母親が学校へ働きかけたところ、医師の証明書があれば考えると言われる。そこで、はるばるパリまで専門医を訪れ、証明書を書いてもらうが学校側は無反応。その医師も交えて学校と話し合いの場をもとともするが、先生は誰一人参加してくれない。

そうした学校側の無理解な対応は、子どもたちにも影響する。「先生をお手本として真似するからサシャを受け入れない」と母親が語るように、サシャ

## トランスジェンダーの子どもから 見える学校の男女の壁

アーヤ藍

のことを男子生徒たちは女の子みたいだからと拒み、女子生徒は男のくせにと拒む。この年齢ですでに「女の子／男の子はこうあるべき」という固定観念が子どもたちにも染み込んでいることを感じる。

サシャがスカートを履いたり、リボンで髪を結んだりすることが、他の子を傷つけるわけではないはずだ。しかし、サシャは自分自身の人生を生きることを許してもらえない。そうした周囲のありようはサシャの性格にも少なからず影響を及ぼす。専門医に質問されても、サシャはほとんど言葉を発しない。ひと言ふた言、ようやく言葉が出た途端、大粒の涙がこぼれ出す。サシャは母親に「いくら闘っても意味がない。がんばっても無駄」と泣きながら訴えたことがあるという。自分らしく生きることを何度も否定された経験は、サシャが自分の思いを誰かに伝えることさえもあきらめさせる。「怒る権利があるのよ」と母親がサシャに伝える姿が胸に刺さる。

映画を観ていると、サシャが女の子として学校でも認められることを強く願いたくなる。一方で、「女の子として扱われる」とはどういうことだろうかとも考える。そもそも学校側が男女を区別しなければ、サシャはここまで苦しまないだろう。日本でも呼称の統一やランドセルの色の多様化、制服の選択制など変化が起き始めている。男女の線引きをせず当たり前に多様な選択肢がある学校が増えることは、多様な子どもたちが生きやすい未来を創るはずだ。



アーヤあい：映画探検家。1990年生。慶應義塾大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことをきっかけに、社会問題をテーマにした映画の配給宣伝を行うユニテッドピープル(株)に入社。同社取締役副社長も務める。2018年独立、映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。

